藤原惺窩研究史

長岡麻里子

一

現代日本の思想状況は、多種多様で、ひとことで論じることはできない。しかし、儒教思想はいまなお今日の人びとのなかに生きている。それは、人間関係においてつねに教訓的であり、しかも、日本の資本主義体制を補完する思想というべきものである。私は、このような問題意識にもとづいて、近世の儒学思想を再検討してみたく思い、以下において、近世儒学の祖である藤原惺窩の研究史をたどってみることにする。

藤原惺窩の先覚研究は、江戸時代では、『学問源流』[1]や『先哲叢談』[2]にみられる。明治以降においても、井上哲次郎氏[3]や西村天囚氏[4]は一般的に取り扱われ、昭和にはいってからは、太田兵三郎氏[5]が基礎資料を編集され、大江文城氏[6]は、日本儒学史のなかで惺窩を取り扱われた。敗戦後は、和島芳男氏[7]や『行状』的思想史研究を是正された今中寛司氏[8]、朝鮮儒学との関係を明らかにされた阿部吉雄氏[9]らがあげられる。また最近では、金谷治氏[10]の研究がある。

私は、これらの研究をたどるに際して、自らの惺窩研究に焦点を合わせて、次の点に関連して追ってみることにする。第一には、『四書五経倭訓』について、第二は、排仏帰儒について、第三は、惺窩の学問あるいは思想をどのようにとらえているかということ、第四には、歴史的にどのような評価付けがされているか、ということについてたどってみることにする。

二

惺窩の『四書五経倭訓』は、慶長五（一六〇〇）年関ヶ原の戦で赤松広通[11]が失脚自殺したため、刊行することができず、また惺窩加点の原本も現在伝わっていない。ただ林羅山の「新板五経白文点本跋」[12]によって、その内

容の性格を知ることができる。『四書五経倭訓』に関して、『先哲叢談』では、惺窩が朝鮮の姜沆[13]に与えた書を引用するにとどまる。[14] この書によると、赤松広通が、惺窩に新に四書五経を書き、宋儒の意で倭訓を加えることを請うたこと、そしてこれが宋儒の意で倭訓を加えた最初のものであることをのべている。これに対して、井上氏は疑いをもたれる。四書に倭訓を加えるのは、岐陽が最初で、桂菴・南浦が修正して惺窩に伝えたということは史的事実であるとし、五経の倭訓はまだないけれども、『周易程伝本義』はすでに南浦が倭訓を加えているのであるから、惺窩が自分の独創と公言するのは、彼の一生の過失であると批難される。惺窩が、文之点盗用[15]との誹謗をうけるにいたったのは、小野季定の『聞書』[16]にはじまる。つまり『聞書』は、如竹の説として、惺窩の新注書の加点についてつぎのようにのべている。惺窩が渡明を欲して薩摩の正龍寺に寄泊した際、文之の論語集註の訓点を知って、これをもち帰ったというのである。『聞書』以後も、『漢学紀源』[17]が、この説を支持し、西村天囚氏も『漢学紀源』を伝承されている。[18]『漢学紀源』巻三・南浦の項には、文禄二（一五九三）年、惺窩が明注の倭点を学ばんと欲して薩摩にはいり、山川港に泊った際たまたま正龍寺で新注和訓を授けるを知って、ことごとく写して帰ったとしている。ところが、惺窩が渡明を決意して薩摩にはいったのは、慶長元（一五九六）年のことであるし、[19]『聞書』にしても惺窩を武田信玄の鴻儒とするなどの誤りがみられ、資料としての価値が疑われるのである。[20] さらに「南航日記残簡」によると、山川港では官人野間口内蔵助邸に滞在しており、『聞書』や『漢学紀源』の正龍寺寄宿・正龍寺問得授受などは、全くの虚構であることがわかる。大江氏は、「室町期以降、京洛の地にての学問は、相当に深い域に達していた。師行家を憚って、新注点の伝承がない丈けのことである。新注書の流布と、その研究の普及していたことは、到底薩摩などの及ぶところではなかった」とし、[21] 如竹や季定が、惺窩の文之点盗用を主張したのは、「近世儒学蔚興の源を、自国学者首倡の功に収めんとした為であろうとおもはれる」[22]と結んでおられる。太田氏は、以上のべた大江氏の説を紹介し支持されている。[23] 和島氏は、「確かに、惺窩が入薩後、山川に滞泊するに至る間に、かの薩南学派の活発な動きや、その活動の所産たる文之点から何ものも学び得なかったとは考えがたいから、例の剽竊説をまったく如竹門下の学派的偏見による讒謗と斥け去るのは行き過ぎといわねばなるまい」[24]として、大江氏の説に全く賛同はされていない。しかし、「四書五経全部に一貫した点法を以て、しかも新注による和点を施したのは確かに当時の盛挙であった」とされ、「思うに惺窩の新注学はその薩南学に負うところにまたこの姜沆から得たところを加えて一層円熟し、そこにかれの四書五経

和点を可能ならしめたとみるべきであろう」とされている。

阿部氏は、文之点盗用説が大江氏らによって全くの誤りであることが証明され、もはや学界の定説になっているとされ、従来の盗用説の淵源を推測する上に、新たな資料を提供されている。[28] つまり、「正斎書籍考」巻三経部、周易伝義の条下に引用されているもので、その資料によると、惺窩が伏見で「五経跋」を書いた同じ年月に、同じ伏見で、僧文之が朝鮮本『周易伝義大全』に和訓を加えていた事実がわかるのである。阿部氏は、こんなところから誤り伝えられて盗用説が生じたものと推定されている。

今中氏は、惺窩の『四書五経倭訓』は、王朝の権威を背景に持つ師行家の家学に対抗し新義を唱えたことになるのであって、学問的にも政治的にも大事業をなしたと評価される。また、赤松広通のように、戦国大名が領国統治に宋学をもってその指導理念としていることをのべられ、「それと同時に領国の政治哲学は一方においてそれぞれの個性を持ち、その故に領国国家の独立と自己主張が文物制度学問の上でも独特にしてかつ社会的・学問的に水準の高い業績や事業を遺す必要があった。その限りにおいて惺窩の『四書五経倭訓』は戦国時代においては政治的・社会的・文化的に洵に大きな意義を持っていたのである」とされている。[29]

三

排仏帰儒については、従来林羅山の作になる「惺窩先生行状」（以下「行状」とする）の記事を史実として論じてきた。[30] ところが今中氏は、この「行状」主義の思想史を批判され、惺窩の排仏帰儒は、林羅山の創作であることを明らかにされた。[31] 「行状」によると、天正一九（一五九一）年の豊臣秀次による相国寺での詩会に惺窩も出席するが、それ以後は秀次の招きに応じず、その怒りにふれ、文禄二（一五九三）年には、豊臣秀俊に従って肥前名護屋におもむく。『惺窩先生文集』巻三[32]にも、惺窩は秀俊について肥前名護屋に行ったことは知られるが、詩の中に自ら「僧」といっているように、なお禅僧としての社会的職能身分を捨てていないことがわかるとされている。さらに惺窩に御伽衆としての職能を認めるとするならば、「その身分は『行状』にいう排仏帰儒を不可欠の条件とする必要がないばかりか、むしろ歌学冷泉家の嫡流であり相国寺詩僧としての惺窩の経歴は御伽衆として最も相応しいものであったといわなければならない」とされている。「行状」は、前述の天正一九年の記事につづいて、慶長四（一五九九）年、惺窩の排仏帰儒宣言の記事をのせている。羅山による「行状」の惺窩像の創作について、同氏は、羅山のひいては林家の政治的意図を指摘される。元和・寛永年間にいたって林家が

実質的に幕府の中に地歩を占めるようになったこと、それ以後排仏帰儒ということが歴史的意義をもつようになったこと、それゆえに林家の政治的意図を「行状」の中に先取りするため、惺窩・羅山の「行状」が林家の人によって編纂されることに意味があったのである。つまり林家が惺窩を羅山学の直接の師承・血脈とし、惺窩を偶像化することによって羅山学の権威づけをしたのであるとされる。今中氏は、惺窩は排仏帰儒というような二者択一はしなかったとされ、結論として、排仏帰儒伝説を否定されている。

四

つぎに、惺窩の学問をたどると、『学問源流』以来、「宋明の諸家を貫穿して之れを包容するの概ありしを以て純然たる朱子学派なりといふを得ず」[30]、「折衷的乃至綜合的態度」[31]、「存養的」[32]というように、広汎な学風ということがいわれてきた。『学問源流』では、学問は正大であるが、章句・文義はなお明らかでないことが多く、詩・文は和風を免がれないとしている。しかし、惺窩の学問を守って次第に琢磨すれば、周・程・張・朱の純粋を得るであろうとし、「伝ヘテ弊ナキ学問ナリ」としている。大江氏[33]や太田氏[34]は、『仮名性理』でもって、惺窩の神儒一致思想を説かれているが、現在『仮名性理』が惺窩の著作でないことが明らかにされている以上、[35]『仮名性理』を資料として論じることはできないと思われる。

和島氏は、惺窩が儒学の師を持たなかったことが、かれの学問的立場を自由にさせた反面、「またかれをして経学の体系的習得を基礎とする応用の才を発揮せしめるに至らなかったのではないか。かの諸学説の比較検討に関するすぐれた方法論の提唱にもかかわらず、惺窩が諸学の中から選択して最も尊重した朱子学に基づいて、かれ自身の注釈を諸経に下すに及ばなかった所以もその辺に見いだされなければならないであろう」と、その限界を示されている。[36]

今中氏のいわれる「存養」とは、「広い古典研究とそれによって得られる広い人間的教養を意味するもので、これをルネッサンス的というならば、惺窩には自然・人生哲学にも、また陸・王の心学にも、さらには『文章達徳録』に見る文・詩にも興味と関心を持ち惣じて哲学・文学・芸術の何れにも通じた広い人間性を生涯の目標としていたようである」[37]とし、「惺窩の学統を結論的に決定するならば、それには姜沆の学問をあげなければならない」[38]とされている。

阿部氏は、惺窩の学問と朝鮮儒学との密接な関係を明らかにされたのであるが、「惺窩の形成した学問・学風は、日本の近世儒学の創成者にふさわしい独自のものであって、もちろん朝鮮や明の学問そのままではな」[39]く、「和漢にわたり、宋明儒学、国文学を蔽う広汎なもので

あった[41]」とされている。

さらに金谷氏は、羅山によった「惺窩答問」や「行状」などを重視する立場でなく、『寸鉄録』・『大学要略』などの著作と、『文集』中の詩文などを重視する立場から、惺窩の儒学思想を検討された。それによると、「惺窩の儒学思想は宋・明の性理の学の伝統をうけるとはいえ、より多く明の心学の流れの上にあり、その問題関心は現実の実践的な倫理課題にあって、宇宙論的な問題をふくむ哲学的な思索の問題にはなかった[41]」と要約されている。

五

最後に、惺窩に対していかなる歴史的評価がなされてきたかをたどってみたいと思う。荻生徂徠によって、惺窩は、王仁・吉備真備・菅原道真と並んで「学宮に尸祝すと雖も可なり[42]」と評されている。「経学の宗師[43]」・「今ノ学問スル人ノ先師宗匠[44]」・「後世文学の祖[45]」・「創業の人[46]」というような評価から、「京学一派を樹立[47]」・「江戸儒学思想の一濫觴[48]」・「徳川文運の各分野に亙って清新なる先駆的役割を果し得た[49]」というように、より具体的に「近世儒学の開祖[50]」として位置付けられるようになってきた。

さらに今中氏は、近世儒学の魁けであり排仏帰儒を最初に行った人という現在の学界の定説を否定される。惺窩学は、羅山学とは反対で、「既成政権に批判的な市民的人間性の拡充と存養を主張し、大陸から人民解放軍の導入さえ辞さないという烈しい在野的、野党的倫理を唱道するものであった[51]」と評価されている。

また金谷氏は、惺窩の折衷的包摂的な立場は、中国の新しい各派の儒学を公平に日本の思想界に紹介し、江戸儒学のはなばなしい開花は、惺窩においてその種子がまかれているとされ、この意味において始めて、江戸儒学の開祖としての性格が正当に把握されたことになると評されている。[52]

以上惺窩の研究史をたどってみると、初期には、日本儒学史のなかの一儒学者として、研究対象であったのが、近世儒学史とくに林羅山との関係で惺窩の思想が検討されるようになってきている。また、太田兵三郎氏の編集になる『藤原惺窩集』二巻は、惺窩研究の基礎資料を網羅している。私は、これらの研究成果をふまえて、惺窩の書翰を中心に、資料を再検討し、今日的な見地から惺窩の思想を明らかにしたいと考えている。

注

① 那波魯堂著　寛政一一（一七九九）年　大阪書房　崇高堂

② 原三右衛門著
『大日本文庫儒教篇』　一九三六年　春陽堂書店　この文庫は左を底本としている。文化一三（一八一六）年九月新鐫江戸書林　慶元堂　擁万堂梓行本

③ 『日本朱子学派之哲学』　冨山房　一九〇五年

④『日本宋学史』　梁江堂書店　一九〇九年
⑤『藤原惺窩集』二巻　国民精神文化研究所　一九三八・三九年
⑥『本邦儒学史論攷』　全国書房　一九四四年
⑦『日本宋学史の研究』　吉川弘文館　一九六二年
⑧『近世日本政治思想の成立』　創文社　一九七二年
⑨『日本朱子学と朝鮮』　東京大学出版会　一九六五年
⑩『日本思想大系28　藤原惺窩・林羅山』　岩波書店　一九七五年
⑪播磨国龍野城主、後但馬国竹田城主となる。惺窩の後援者である。関ヶ原の戦いの時、亀井茲矩の讒言により自殺する。
⑫『羅山林先生文集』巻二　一七五頁　京都史蹟会　一九一八年
⑬晋州の人で、字は睡隠。慶長の役で日本軍に捕えられ、捕虜の身となるが、惺窩らの援助で帰国した。『看羊録』の著がある。
⑭『先哲叢談』二頁　「問姜沆」は、『惺窩先生文集』巻十にある。
⑮南浦の字である。
⑯『日本教育史資料』五　四三一頁　臨川書店　一九七二年
⑰『続々群書類従』第十教育部　六一四頁　国書刊行会　一九〇七年
⑱西村前掲書　一八〇頁以下
⑲「南航日記残簡」（『藤原惺窩集』巻下　三七七頁）
⑳大江文城氏も『聞書』の原本の所在を捜されたが、何等の手がかりも無かったといわれている。（大江前掲書　六四頁）
㉑大江前掲書　六八頁
㉒同右　六九頁
㉓「藤原惺窩に就いて」（『藤原惺窩集』巻上　四七頁）
㉔和島前掲書　二九二頁
㉕阿部前掲書　六九頁
㉖今中前掲書　四九頁
㉗『先哲叢談』　四頁、太田前掲論文　五二頁、阿部前掲書八九頁
㉘今中前掲書　一三五頁
㉙『藤原惺窩集』巻上　六二頁
㉚井上前掲書　二九頁
㉛太田前掲論文　五一頁
㉜今中前掲書　八四頁
㉝大江前掲書　九八頁
㉞太田前掲論文　五六頁
㉟今中前掲書　二一六頁
㊱和島前掲書　二九六頁
㊲今中前掲書　八四頁
㊳同右　八四頁
㊴阿部前掲書　一〇八頁
㊵同右　一〇八頁
㊶「藤原惺窩の儒学思想」（『日本思想大系28　藤原惺窩・林羅山』　四六八頁）
㊷「与都三近」（『徂徠集』巻二七）
㊸『学問源流』四丁
㊹同右　五丁

㊺『先哲叢談』　一頁
㊻井上前掲書　二二頁
㊼大江前掲書　八一頁
㊽同右　八二頁

㊾太田前掲論文　七一頁
㊿阿部前掲書　一一三頁
(51)今中前掲書　一五九頁
(52)金谷前掲論文　四六九頁